
気まぐれセカンドライフ

誰かの何か

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれセカンドライフ

【Nコード】

N0239Z

【作者名】

誰かの何か

【あらすじ】

高校生の主人公である潤が突然異世界へ飛ばされて、ある時はニート、またある時は宮殿の主になったりと、セカンドライフを満喫していく。そんなお話。小説を書くのが初めてで、書き方・内容が拙いですが、どうぞよろしくお願いします。

潤「仕事したり闘ったりしてリアルが充実してはいるが、リア充とは違うと思わざるを得ない今日この頃：チクショウ、目から汗がとまらねえ」

1 なんか、死にました（前書き）

はじめまして

作者の文才の都合上、亀更新となりますが、よろしくお願いします

では、はじめりはじまりゝ

1 なんか、死にました

大地に邪なるもの埋め尽くす時、虚空より人舞い降りて、混沌と共に世界を破壊するであろう。（『ウィスニルの予言』）

「ん、ここは？」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見あたらないから真っ白い空間か？

まあ、どちらにせよここは俺の知らない場所には違いない。

・・・エエッ！！

まあ、落ち着きましようや俺。

まずは今までの行動をおさらいしよう。

学校から帰って来る↓夕飯を食べる↓勉強、と思わせてラノベ↓1
2時を過ぎたので寝る↓目が覚める↓今

ああ、もしかしなくてもこれ夢じゃ…

「夢じゃないよ」

五月蠅いな、人の思考に割り込むな。

・・・エエッ！！（本日2回目）

「な、なんだお前。ってかどこから出てきた！」

さっき俺に声を掛けたであろうアニメに出てきそうな少女に向かって俺は言った。

「私？私は転生の女神だよ？」

この娘は可哀想な子という認識でいいのかな。

「違うもん。転生の女神だもん！」

んな事言われたって：

「じゃ、女神らしい事見せてよ」

「いいよ」

そう言う女神（自称）は何やら小声でしゃべり始めた。
シ、シニールだ：

ボワッ

独り言を終えたららしい少女の手の平には炎の球が現れた。

「これが魔法。どう？これで私が可哀想な子じゃないって分かったでしょ」

こんなの見せられたら

「お、おう。本当らしいな」

としか言えませんよ。はい。

「で、漸く本題何だけど、どうやらあなたは寝ている時に死んじやったらしいの」
ん？

「ちょ、ちょっと待て。え？俺死んだの？」

「うん。原因もよく分からず」

しかも原因不明！

ってか読めてきたぞ、この後俺は異世界に転生されて、厄介事に巻き込まれていくんだな。で、この転生の女神（自称）が俺の案内役と。

はいはいテンプレ乙

「その通り！あなたはこれから異世界でセカンドライフを始めるの」
提案じゃなくて決定事項かよ…ってか心を読むな。

「俺に拒否権は？」

「ない！」

デスよね。

「まあ、そのまま異世界ってのも可哀想だから何か願いを3つまで

叶えてあげるよ」

テンプレキター！

「じゃ、今のまま何も変えずにスタートして」

「良いの？反則的な能力も与えられるよ？」

「良いんだよ。俺にも色々あるからな…」

よし、いい感じでミステリアスな感じになりそうだ。

「なる程。元から身体能力が並外れてるのか」

「俺のミステリアスを返せー！！」

KY女神ー！！もう流行ってない？さいですか。因みに俺は今リアルorzになっている。

「な、何で落ち込んでるのかよく分からないけど、ごめんなさい」

「はあ…まあいいや。で、2つ目は異世界でもお前と話が出るようにして」

異世界の知識なんて俺にはないからな。

「いいけど私も暇じゃないから何時でもって訳にはいかないよ？」

「それでもいい。じゃ、3つ目は俺が行く世界の言語が話せるようにして」

「おっ！いい事に気付いたね。あなたは反則的な能力がないから言語も学ばなければいけないところだったんだよ」

だろうな。俺が元の世界で読んだ本（もちろんラノベですが何か？）にも似たような事が書いてあったからな。

「じゃ、早速異世界へ…」

「ちょっと待った」

「何よ」

決めゼリフを遮られてかなりご不満な様子。でもこれだけは聞いておきたい。

「まだ一切人物紹介をしてな…」

「メタ発言すなッ！！次の話ですればいいでしょー！！」

次の話って…お前もメタ発言してんじゃねえか。

「いいの！じゃ、気を取り直して異世界へしゅっ…」

「出発」

・
・
・
・
・
して
やっ
たり

1 なんか、死にました（後書き）

次回予告

潤「予定通り人物紹介をします。ってか絶対に俺の容姿とか分からないもんね」

2 人物紹介（前書き）

2話目 いただきます

2 人物紹介

○羽山 潤はやま じゅん

我等が主人公の潤君。黒髪黒目、日本の平均的な身長にやや細身。容姿も中の上と、何処にでも居そうな高校生。身体能力はかなり良いらしいが如何に：ある1点において以外は優しい性格。異世界でどう生きていくのか乞うご期待。

○転生の女神てんせいのめがみ

主人公を異世界へと送る案内役。金髪灼眼、150cmを少し越えた身長と容姿は上の中とかなり良い顔立ちのようで：身体の方はメリハリがほとんど無く今後に期待、は出来な：

バコーンッ！！

しばらくお待ちください

「えー、作者が何者かに、ここ大事。何者かに襲撃されて星なってしまったので、私、転生の女神が代わりに紹介しまゝす。」

「何者かに、ねえ」

「何者かに、だよねー潤君（ニコッ）」

「イ、イエス マム。何者かにであります！」

「よろしい。っと、話が逸れてきた。じゃ、人物紹介はこの位にして、潤君が飛ばされた異世界について軽く説明しちゃいまゝす」

「まあ、本編じゃまだ異世界に着いてないけどな…」

「細かい事はいいの！潤君が飛ばされた異世界『ウェドリア』は剣と魔法がメインの世界でゝす」

「物騒な世界だなあ」

「まあ、魔獣もいるしね」

「うわゝ、やっぱ行きたくねゝ」

「そう言わずに、楽しい事も沢山あるからさゝ逝ってきなよ」

「危ない世界なだけにシャレになってねゝ!!」

「っと、また話が逸れちゃった。潤君がどうでもいいこと言うから」

「どうでもいいことじゃねえよ。リアルに死活問題だよ」

「ハイハイヨカッタネー」

「誰か助けてゝ!!」

「で、この世界にはお約束のギルドとか獣人がいる他に、古の神々の宮殿がどこかにあるらしいよ。私も一応神様だけど、そっちには居ないんであしからず」

「無視しやがった。こいつ遂に俺の存在をスルーし始めた」

「あと、この世界には貴族も居るんでこの世界に行く人は要注意だねゝ。あ、そういえばこれからそこに逝こうとする人がいるんだよゝ?笑っちゃうよねゝ」

「俺の扱いひでえ!しかもまた逝こうになってるし…」

「じゃ、いよいよ本編ヘレッツゴー!」

「開始早々に逝かないようにするんでよろしくお願いしまゝす」

2 人物紹介（後書き）

次回予告

潤「次からやっとなんか異世界か。ん？なかなか危ない香りが…ってか人物紹介の時、俺らどこで喋ってたんだ？」

3 なんか、緑のものが…(前書き)

やっと異世界に到着

3 なんか、緑のものが…

「何なのこのテンプレ展開」

転生した瞬間、といっても床に穴が開くとかじゃなく、眠くなつて意識失つて目覚めたらここに居た。俺の目の前には体長2メートルを越そうかというキツネ色の体毛を纏った狼っぽい生物が3匹居た。

それもうキツネでいいんじゃないかね？

とか思つた奴、後で屋上来い。キツネは狼より愛くるしい顔してるよ。目を見る目を、丸いキュートな目とつり上がった獲物を狙う目だよ？どっちがかわいいかなんて分かりきってるじゃないか。同じネコ目イヌ科だとは思えないね！まあ、実際にキツネも狼も動物園でしか見たこと無いんだけど…そう、俺とキツネとの出会いは小学3年生のとき遠足で…

「潤君。作者も読者の皆様も飽きてきてるよ？作者に至っては敵を狼からミドリムシにしようか悩み出したよ？」

「ミドリムシッ！？敵じゃねえじゃん！ってか戦闘に持ち込むほど作者に才能があるようには思えないよ」

ミドリムシが現れた

「何かデカイミドリムシきた〜！ってか変なテロップ流れた〜！」

ミドリムシなんて教科書でしか見たことないからあれがそうなのか分からないけど！狼と同じ位の大きさの緑の物体に紐みたいなのついてるぞ奴は。あれは教科書の写真と一致する（大きさ以外はな）。

「あゝあ、作者怒らしちゃった。じゃ、あとは頑張ってね〜」

KY女神はそう言う俺との交信を切った。クソッ、自分だけ作者の怒りから逃れやがった。

「はぁ…しょうがないからやりますか」

そう俺が言くと、今まで律儀に待ってくれていた狼が一斉に向かってきた。ミドリムシはその場で待機のようにで…

「戦闘描写とか作者は書けんのか、なっ！」

真っ正面から突っ込んできた狼その1を避けてすれ違いざまに狼その1の首ら辺に肘で1発打ち込んだ。その1発で狼その1は気絶をした。急所だからちよつとした力で気絶させられる。続いて狼その2が、俺が1匹倒して油断している所を狙ったのか、後ろから飛びかかってきた。

「俺の辞書に油断の2文字は、ないっ！」

振り返るような時間的余裕はないので、狼その2に回し蹴りを食わす。そうすると狼その2が5メートル位吹っ飛んでやっぱり気絶。

狼その3は自分1匹だけじゃ倒せないと悟ったのか、逃亡した。相手の実力を理解したのか。なかなか賢い狼だ。

「あとはコイツだけか…」

今まで空気となっていた、作者の嫌がらせの象徴であるミドリムシ様が鞭毛運動をしている。

人類と単細胞生物の決戦が今始まる？

3 なんか、緑のものが…（後書き）

次回予告

潤「次回はいよいよヤツと戦闘だぜ！作者はまだまだ戦闘描写に慣れてなさそうだけど、頑張って書いてくれよ？」

4 なんか、力押しです(前書き)

前回に引き続き戦闘シーン

4 なんか、力押しです

「ミドリムシ」それは中央にピンクの細胞核や、ニョロニョロした鞭毛を持つユーグレナ目ユーグレナ科の生物。ちなみにユーグレナとは美しい眼点という意味だ。

つまり、気持ち悪いという認識でOKという事。

そんな生物と俺は戦おうとしている。素手で。

・・・・手袋って、偉大だったんだな

「じゃ、気分は乗らないけどやりますか」

俺がヤツに向かって走り出すと、ヤツは鞭毛を俺に伸ばし始めた。

「キモイっつの」

俺は鞭毛を掴み取り引きちぎった。幸い鞭毛の感触はロープのそれと似ていたのでテンションが下がることはなかった。

ヤツは特に痛みを感じないのか、ちぎられて短くなった鞭毛を再び俺に向けてきた。

いちいち引きちぎってもきりがないので、鞭毛を避けつつ本体の核を壊しに向かった。

と、そこで俺はある事を思い出し、足下にあった石を拾って鞭毛の届かない位置まで下がった。

「あれが本当にミドリムシだとしたら」

俺は石をヤツの核目掛けて投げる。

音速に迫る速さで。まあ、この事はそのうち話すとして…

ゴスツという音がして、核の少し手前で止まる。ってかアイツ硬すぎだろ。撃ち抜くつもりでやったのに…

シューッ

この音？そりゃあヤツが再生してる音に決まっているだろ。はあ…
「やっぱりな。ミドリムシって名前も動きも虫っぽいけど実は光合成
成みtainな植物っぽい事もできるんだよな」

正確には原生生物って言って、動物でも植物でもない。中途半端
な奴め。

「せっかく頭使って倒そうと思ったけど、弱点も見いだせないし
手札も石と素手しかない。力押しでいきますか」

という訳でここからは読者の皆さんには楽しくも何ともない戦い
が始まりまゝす。

まずは石を沢山拾う。相手がその場から殆ど動けないのが幸いだ
な。水の生物陸に揚げるからだ作者め。

そんでもって拾った石を核に向かって連射
ズドドドドッと凄いい音を出しながら石はヤツの核に向かって飛
んでいく。寸分変わらず同じ場所に。

そしてヤツの再生速度を超えた連射で遂に核を捉えた。

最後の1発として大きめの石をヤツの核に向かって全力で投げつ
けた。すると核が壊れ、ヤツの身体は爆発するように飛散した。

最後の仕事として俺は飛んでくるヤツの残骸を避けて避けて避け
て…

ってな感じで人類と単細胞生物との決戦は人類の勝利で幕を閉じ
た。

4 なんか、力押しです（後書き）

次回予告

潤「やあゝ、ヤツはとにかくキモかった。ってか光合成って再生関係なくね？まあ、いいや、次回は異世界で初めて人と会うぜ。第1異世界人がどんな奴なのか気になるな」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（前書き）

人に、会いたいです。

5 なんか、作者に嫌われた気がします

無事作者の悪意を倒して、今は広い平原の中を移動中（ちなみにミドリムシ）
元の世界で死ぬ直前の服装は上下ともにジャージなのでパジャマで
戦闘というシユールな画にはならなかった）。ってか広すぎじゃね
！？周りに何もねえよ。KY女神は忙しいのか繋がらないし…こう
何もないと方向が合ってるのかすら分かんねーよ。

～1時間後～

「まだかよ～そろそろ木の1本でも見えていい頃だろ～」

～2時間後～

「……………」

～3時間後～

「作者アアアッ！！こりゃ何の嫌がらせだぁ！さっきから石こ
ろとか花の位置が何一つ変わってねえよ！風景のスペックが低いな
んてレベルじゃねえぞ！？」

～4時間後～

「作者さんよ～。このままだと予告で言ってた第1異世界人に会
えずにこの話終わりそうだぞ～？」

ガタン

「ん？何の音だ？って、やっと風景動いた～！うわ～、前に進める
って素晴らしい！」

お～、森が見えてきた。何か達成感で涙が…

あ、そうそう、KY女神も居ないし1人で喋ってても危ない人に

なっっちゃうから、こっからは心の中での呟きで。

森に入ってから空も暗くなり始め、良さそうな場所（サバイバルの経験なんて無いのであくまでも良さそうな場所）も見つかったので、今日は野宿することとなった。食事はしょうがないから木に実っていた果実らしきもので済ませた。

・・・そういえば今回って人と会うんじゃないかったっけ？まあ、思ったより進まなかったから断念したのかな？

そんな事を考えながら俺は寝る準備をはじ…

ヒュンッ

何かが俺の耳元を過ぎていった。ナイフだ。その時俺はこう思わざるを得なかった。

人と会うってそういう事…！？

確かに第1異世界人だけでも、確かに盗賊じゃないなんて言うてなかったけれども！

俺がそんな事を思っていると、森の中から2人の盗賊（仮）が姿を現した。

「よお、にいちちゃん。こんな時間に森にいるたあ感心しないなあ」

と、盗賊1（仮）

「そうそう、俺たちみたいな奴に狙われるぜえ？」

と、盗賊2（仮）

「もしかなくても、あなたたちって盗賊ですか？」

と、俺は盗賊（仮）に尋ねた。すると盗賊1（仮）は、

「ああ、そうだぜ？さっきも街道を歩いてた新人っぽい冒険者を殺して金を奪ってきた。なあ、相棒？」

と下品なニヤツキを浮かべて隣をみた。しかしそこに盗賊2（断定）の姿はない。

「ああ、隣に居た人ならさっきあなたが『ああ、そうだぜ?』と言った瞬間に殴り飛ばしたんで今頃はどっかの木にぶつかって気絶中かと」

決して作者が戦闘描写が下手だから何時の間にか終わらせておこうなんて考えたわけじゃない。

「てめえ、よくもっ!!」

盗賊1(断定)は顔を真っ赤にして懷から大振りのナイフを取り出した。ちなみに顔を真っ赤にしてるのは恋する乙女的な感じじやなく、怒り心頭って方の…え?分かってる?さいですか。

顔を真っ赤にするって言えばね、俺が中学2年生の時に…

「死ねや!」

盗賊1(断定)が俺に向かって手に持っているナイフを振り下ろしてきた。まだ話の途中なのに…昼に出会った狼たちよりせっかちだな。しょうがない、サクッと終わらせますか。

「舐めた真似しやがって」

再び俺にナイフが迫る。白刃の煌めきは今まさに俺の命を刈り取るうと…やめたやめた。俺にこんな高度な思考なんて似合わないな。

「そんなもん振り回して危ないですよっ」と

そう言っただけは振り下ろされたナイフを避け、盗賊1(断定)に足払いをして前向きに倒れさせようとする。案の定盗賊1(断定)は倒れ始め、俺は盗賊1(断定)の鳩尾目掛けて膝蹴りを食らわした。盗賊1(断定)は膝蹴りがクリーンヒットして肺の中の空気と共に血を吐いて気絶した。

「ふ、終わったな」

そう言っただけ俺は盗賊たちを放っておいて夜の森を後にした。眠気?命のやりとりをした後にそんなもんありませんよ。

「あ、どうせなら街道への出方聞いとくんだった」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（後書き）

次回予告

潤「最近後書き以外で名前が出てこない潤君で〜す☆え〜つと、次回はいよいよ街に入るのか？ ってかろくなもん食ってないんでマジで入れて下さい。あと作者、盗賊の表記がいちいち鬱陶しいんだけど。俺の扱いも酷いし…後で覚えてろよ〜」

6 なんか、いい人みたいです(前書き)

潤はニートにジョブチェンジした。

6 なんか、いい人みたいです

「はあ、やつと着いた」

俺は盗賊気絶させた後、さんざん歩き回って街道を見つけ、やっとの思いでどっかの街の前まで辿り着いた。詳しく説明しろって？ご冗談を、今は腹が減ってるんでそんな暇ありませんよ。

（ここはカラコルね）

KY女神もつい5分位前に繋がった。何で括弧が変わったか？それはだなく、実は今までアイツは俺の頭の中に直接話し掛けてたんだ。んでもってその事をさっき知らされて、なら俺もできんじゃない？ってなって実際に出来ちゃったから、じゃあ声に出してないんだから括弧を変えなきゃっていうわけ。

（街の名前か？）

こんな感じで。

（（そう。貿易都市で色んな物が手に入るんだよ？））

（（へへ。でも俺金持っていないぞ））

盗賊から剥ぎ取ってくるべきだったかな：

（（この街、っていうか殆どの街にはギルドっていう組織があって、そこに加入すれば依頼の報酬としてお金が貰えるよ））

（（なるほど。じゃ、早速行きますか））

一旦交信を切って俺は街の中へと入っていく。

しばらく歩いていくと、明らかに普通の住宅とは大きさも雰囲気も違う建物が目に入った。

「あれがギルドかあ。でかい建物だな」

入ってみないことには始まらないと、その建物に足を踏み入れる。中はとても広かったが、ゴツイ男が沢山いて、どちらかというと狭苦しい感じがした。

カウンターには受付嬢、ではなく爽やかな男性が座っていた。テンションだだ下がりだ。

「すいませ〜ん。ギルドに加入したいんすけど〜」
テンション今なお下降中の俺。

「はいっギルドの加入ですね！こちらに身分証明書と経歴をお書き下さい！」

やたらテンション高い爽やか兄さん。

ん？身分証明書なんて持ってないぞ〜？

「身分証明書ってないとダメですかね」

ダメもとで聞いてみる。そして帰ってきた答えが

「ダメですね。もし犯罪者を加入させてしまうとギルドの信用に関わりますから」

というものだった。ま、何となく分かってただけど。

「身分証明書忘れちゃったんで出直して来ます」

という無難なことを言ってギルドを出た。

「さて、どうするか〜」

KY女神とはまた繋がらなくなったし…とりあえず仕事探すか〜

・ ・ ・ ・ ・

仕事みつからね〜！！何でここの仕事は専門的なものばかりなんだよ！

おまけに商売始めようにもギルドに加入しなきゃ出来ないらしいし…ギルドなんて創った奴今すぐ出てこ〜い！

はぁ、もう仕事しなくていいかな。俺は悪くない。社会が俺を受け入れてくれないだけなんだ。ハハハハハ。

「あんたこんな所で何してんの？邪魔なんだけど」

不意に俺の背後から声が聞こえた。振り返るとそこには…

いい感じで区切れそうだから今回はここまで。え？ダメ？さいですか。

作者からダメと言われたのでもうちよつと進めるよ。

俺の背後に立っていたのは、綺麗な夕焼け空をそのまま移したかのようなオレンジ色の髪をもち、自信に満ち溢れているようなやつり目の目も髪と同じオレンジ。容姿は上の上と言っても過言では無い。目測で身長160cm位の少女だった。だが、さっきの言動といい、この容姿といい、

「どこのツンデレですか？」

しまったアアアッ！！思わず口に出してしまった！

「はぁ！？何訳わかんない事言ってるの？」

反応から察するに異世界にはツンデレという言葉は無いらしい。が、機嫌を損ねてしまった。

「ゴメン。君があまりにも可愛かったからつい」

すると彼女は顔を真っ赤に染めて、

「か、可愛い！？な、何変な事言ってるのよ！」

と言ってきた。うん、ナイスツンデレ。

「ところでさあ、今日俺金も無くて泊まる所無いんだよ。1日だけ泊めてくれない？」

深刻な問題を忘れてた。って事でお泊まり交渉開始！

「ふ、ふざけないで！誰があんたなんか」

開始2秒でノックダウンされました。

「そ、そうか。残念だが他をあたるよ」

無理に泊めてもらうわけにはいかないからなく。じゃ、今夜も野宿かな。

よっこらせ、と俺が立ち上がって街の外へ歩き出そうとすると、

「い、1日くらいなら、しょうがないから泊めてあげてもいいわよ」
さっきも言ったがもう一度言おう。

ナイスツンデレ

6 なんか、いい人みたいです（後書き）

次回予告

潤「何だあの前書きはアアア！俺は断じてニートじゃない！ニートっていうのはだな、not in education, employment or trainingの略でだなく・・・（長いので省略）・・・だから俺はニートじゃない！さて、ではやっと次回予告だな。次回はツンデレと仲良くなれば彼女の過去が明らかに！全ては俺次第ってか。選択肢間違えないようにしないと」

7 なんか、真面目です（前書き）

何か纏まりの無い話になってしまった。

7 なんか、真面目です

「おじゃまします」

そう言っただけはツンデレさん（仮称）の家に連れてもらった。1人暮らしなのか生活感を感じさせる物はクローゼットとテーブルとイスくらいだった。キッチンはあるが料理はしないのかあまりにも綺麗だ……ってか未使用だろう。

「何突っ立ってんのよ。さっさとそこら辺に座りなさい」
では遠慮なく、とイスに座る俺。ツンデレさんも近くのイスに座る。

「ん？　そういえば君って1人暮らしだよ？　何でイスが2つも……はっ！　もしかしてこれには今回の話のキーポイントなんじゃ……」

「何1人で暴走してんのよ？　イスが2つあるのは、このテーブルを買ったときに付属品として付いてきたからよ」

バツカじゃないの、と言わんばかりに……

「バツカじゃないの？」

言われました。

「ごめんなさい……それにしても生活感の無い部屋だな」

女性にこんな事聞くのは失礼だと分かってはいるけど何か引っ掛かるものを感じたので聞いてみる。

「あ、あんたなんかに関係無いでしょ！」

やはり無理か……ってか一切デレを見せないってどういうこと？　このままじゃせつかくのツンデレがツンツンになっちゃうぞ？

「悪かった。そうだ、まだお互いに自己紹介してなかったよな？」

「え？　ええ、まだね」

自己紹介は大切だからな。お互いの印象アップの為に。

「俺の名前は羽山 潤。出身とかは……知リたかったら教えるけど……」

そう言っただけツンデレさんを見る。

「珍しい名前ね。話すことが嫌じゃないなら教えて。犯罪者だところちが困るし」

この世界って犯罪者が多いのか？ギルドでも言われたし：だが何て言うべきか、いきなり異世界人ですなんて言っても信じてもらえないだろうし。

「羽山 潤って珍しい名前だろ？それは俺が他の世界から来たからなんだ」

って事で正直に言うことにしました。

「何言ってるの！？確かにハマなんて名前は珍しいけど他の世界なんて：ふざるのもいい加減にして！」

まあ、こうなりますわな。

「今は信じてもらえなくていい。あと、俺の名前は潤の方。羽山はファミリーネームだよ」

「ふーん、まあいいわ。言動は怪しいけど悪い人じゃなさそうだし」言動は怪しいけどって：ホントの事なんだけどな」

「そりゃどうも、じゃ今度は君の名前を教えてよ」

「私？私はセレン。セレン・レイナンドよ」

「セレンね。セレンはギルドに入ってるの？」

今更だがセレンの腰には西洋の剣がさしてある。

「ああ、この剣を見て言ってるのね。いいえ、ギルドには入ってないわ。ただの護身用よ」

ふーん。日本じゃ剣なんて持ってたなら即銃刀法違反で捕まるから遠い存在だったけど、こっちじゃこんな一般的なのか」

「そういえば、セレンの髪の色って珍しいけど、それって地毛？」

元の世界にこんな髪の色の人がないのはもちろん、こっちの世界でも赤、黄、緑、青の4種類しかいなかった。

そう言った瞬間、セレンの顔に影が差した。

これが今回の話のキーポイントになりそうだな。

「ええ、まあね」

と、さっきまででは想像もつかないほどその声は小さく、重かった。

そんな重苦しくなった空気の中、俺は思った。

あれ？俺ら（作者含む）が考えてた以上にシリアスだぞ。

「何か聞いちゃいけない事だったか…その、すまん」

ここでふざけるのは少し違う気がするので素直に謝しておく。

「いいの。気にしないで」

・
・
・
・
・

気まずくくく！誰か助けて！ってかKY女神仕事入りすぎだろ！
繋がりにく過ぎるわっ！！

一体どこで選択肢間違えたんだ？あれ？ってか最初から選択肢のコマンドが下に出てないぞ？まさかこれはギャルゲーじゃなかつ…
「ちょっと長くなるわよ？」

「はいっ？」

何のこと？選択肢のコマンドが出てない理由か？

「私の髪の色、珍しいって言ったでしょ？」

「あ、ああ」

そっちの話か？

「私の髪のこのオレンジ色はね、この世界じゃ異端の色なの」

「異端？どうして？綺麗な色なのに」

「う、うるさい！黙って聞いてて！」

こんなシーンでツンデレ発動させなくても。

「人が生きていく上で欠かせない太陽が沈み、闇が人々を包み込む」

直前の色。それは破滅の色と人々から恐れられてるの。それがこのオレンジ色よ」

「んなバカな」

髪の色なんてどうしようもないだろう。

「そんな事を教義としているのが、この世界の人口の9割以上が信仰している《シャイネン教》よ」

ドイツ語で《光る》か、如何にも闇が嫌いそうな名前だ。

「そうして私はこの16年間迫害され続けてきたの。どうっ？これであなとも私の事が嫌になったでしょ！？いいのよっ、もう慣れるか…」

「今まで、辛かったんだな」

そう言った俺は、いや、そうとしか言えなかった情けない俺はセレンの頭を撫でる。

「な、なにを……ふ、ふえ〜ん」

と、遂に限界がきたのか泣き出してしまった。

「泣くといいさ。その涙と一緒に今まで溜め込んできたものの全部流しちゃえ」

そうして俺は彼女が泣き止むまで頭を撫で続けた。

7 なんか、真面目です（後書き）

次回予告

潤「珍しく真面目度の高い話だったな。こんなん読んでも面白くないっつゝの。次回は頼むよ？次回はどうやらセレンとお出掛けするらしいぞ？マジっすか？めっちゃ楽しみになってきた！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239z/>

気まぐれセカンドライフ

2011年12月2日19時50分発行